

三位一体の主日

第一朗読 申命記 4・32-34、39-40
第二朗読 ローマ 8・14-17
福音朗読 マタイ 28・16-20

2024.5.26 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

わたしたちが信じている神様は出来事を通して人を導かれる、そして出来事を通して人を成長させ、造り上げられるという、そういう関わりを持たれる方だと信じております。

一番はっきりした例が、イエス様の最初の弟子たちはナザレのイエスという人物に出会ったということを通して、自分たちの生き方や考え方を全く変えられた、人生が大きく変わったことを経験したわけです。自分たちは神様に出会ったのだというふうに伝えていきます。

しかし、同じ体験をしても、そのことによって影響を受け変えられる場合と、変えられない人がいる。同じようにナザレのイエスに出会った人であっても、まったく弟子たちとは違う、ただ通り過ぎていくひとつの出来事として、あるいは面倒なことを持ち込む人としてのみ体験した人もいます。

また、イエス様に付いて行った弟子たち、多くの人々の中には、イエス様が十字架に付けられるということを見て、「ああ、期待外れだったなあ」と言ってまた元に戻って行くってということもあり得たわけです。

そういう意味では、同じ人物に出会っても、そういう出会いの体験をしても、救い主キリストに出会ったか、そうではないただの出来事であったか、恵みの体験になるのか、そうではないのかという違いが出てきます。

第一朗読はイスラエルの民にモーセが今までの自分の過去を振り返って、こんな恵みを受けた者はいないんだってということを言い聞かせる、そういう場面が第一朗読で読まれました。第一朗読の申命記は、イスラエルの民がエジプトから脱出して来て、そしてこれからヨルダン川を越えて神様とともに住む新しい国を造る、その直前の出来事として舞台設定はなっていますが、実際には、書かれたのはもっと後の時代で、既に国が出来ている、そういうような時代に、でも自分たちは特別な恵みを受けて、今こうしているんだってということを思い起こしなさいっていう、そういう意味で書かれています。

しかし、過去の出来事を違うふうにも言う可能性があったわけです。

例えば、モーセは、「自分たちは奴隷であったのに、神様の特別な恵みによってエジプトから脱出して、そして今この素晴らしい国で神様とともに生きる、その恵み

に与っている。こんな特別な体験の恵みに与る者は他にいないんだ」っていうふうな言い方をしますけれど、「自分たちはエジプトで奴隷だった。それだけじゃなくて、奴隷の上に、エジプトの国から逃げて行かなくちゃなくなっていて、そしてあの肥沃で広大なエジプトに比べたらちっちゃい、ちっちゃいこの国の中で暮らさなきゃならなくなった。ああ、いいことなんて何もない。周りを見れば大きなアッシリアという国もある。エジプトっていう国もある。栄えている。それに比べて自分たちは全然ラッキーじゃないなあ」というようなものの見方、言い方もあり得たわけです。

しかし、モーセは、あるいはモーセの口を通してみんなに思い出させたかった申命記を書いた人は、「そうじゃないんだ。今こうして自分たちがあることの中に神様の特別な恵みが働いているからこそ、君たちはこうなんだ」っていうことを一所懸命言うわけです。

なので、同じ体験をしても、それを恵みとして受け取るのか、あるいは呪いとして受け取るのか、受け取り方によってそれが恵みにもなり、呪いにもなると言えるんじゃないかなと思うんです。その受け取り方、自分たちが体験している出来事をどのように解釈し、どのように受け取るかを助けてくださるのが聖霊だと言うことができます。聖霊の助けによって、弟子たちはナザレのイエスとの出会いを通して救い主に出会うことができた。それによって全く変えられて、成長させられた。父である神様がそのことを通して導かれたって言うことができるわけです。

わたしたちもそれぞれの人生をもう一度聖霊の助けのもとに振り返るということは意味があるんじゃないかと思います。いつもミサのたびごとに合言葉をもって確認しています——「主は皆さんとともに」、「またあなたとともに」——主、救い主はいつもわたしたちとともにいらっしゃるんだっていうことを。それは一つの合言葉だけではなくて、その思いを持って今までの人生の歩みを振り返るならば、恵みとして受け取らなかつたこと、あるいは見落としていたことの中に、救い主イエス・キリストとの出会いは既に体験していたということを見出すこともあるのではないかと思います。そのようにして出来事を恵みとして受け取る時に、わたしたち自身がそのことによって成長させられて、変えられていく、造り上げられていく。父である神様がご自分の神の子、似姿としてお造りになった本当の姿になっていくのだと思います。

そういう意味では、聖霊というのは出来事の解釈というか、わたしたちの受け取り方を助けてくださり、そしてキリストに出会うように助けてくださる。キリストとの出会いはわたしたち自身を変え、造り上げていく。そういう父と子と聖霊の恵みの中にわたしたちは招かれているということが言えると思います。

第二朗読では、パウロは、わたしたちは恐れの中ではなく神の霊を与えられたんだと言います（ローマ 8・15）。恐れとか不満の中、ものの見方によって自分の人生の中の恵みを見落としていく、あるいは「やなことばかり」っていうふうに解釈

で決め付けてしまう、そういう力に引きずられるのではなくて、神の子とする霊、聖霊によって自分の人生を振り返り直し、そしてその中に既にともにいらっしゃったイエス様に出会い直していくことを通して、今のわたしたちがここまで導かれてきたということとともに、もう一度その恵みによって更に自分自身が、そして他の人とのつながりが豊かなものにされていく、その導きに信頼しながら、今日もイエス様に出会う、その恵みを願いながら、また既に与えられている恵みに感謝しながら、このごミサをともに捧げたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>